

高次脳機能障害のリハビリテーション

第6回 「Rusk 研究所の神経心理ピラミッド」

Hi、みなさん。お元気でしょうか。今回は、記憶障害について話をさせていただきました。記憶の問題に対処するには、記憶の問題だけを考えるのではなくその他の機能も考えないとならないという点が大きなポイントです。では、実際にはどう考えればよいのでしょうか。今回はこの点について触れたいと思います。

米国ニューヨーク大学 Rusk 研究所では、後天性脳損傷による高次脳機能障害を神経心理ピラミッドと呼ばれる独自の方法でまとめています(図)。これは認知機能が階層構造を形成していることを示しています。かつその順番も考えられており、下の階層にある機能はその上にあるすべての機能に影響を及ぼしていると考えます。例えば、この考え方に基けば、ピラミッドの中ほどにある「記憶」を正しく機能させるには、記憶機能そのものだけでなくその下位にある情報処理や注意力、抑制や発動性、覚醒などにも配慮を要することになるわけです。

このピラミッドは、欧米の認知リハビリテーションの経験の蓄積に、Rusk 研究所の長年の臨床経験を合わせて作られてきた仮説です。そして、現在もより良い形にしようと改訂が続けられています。用いられている用語に独自のものが多く、検証にも正直なところ課題が残ります。しかし、例えば、認知機能が階層構造を構成するという発想は、我が国の高次脳機能障害のリハビリテーションに大きな影響を与えました。また、実際の臨床の場でも対応を考える際に、多くのヒントがもらえる図にもなっています。なかなか味わいの深いピラミッドです。

(Have a nice Platinum Week holidays!)

(青木 重陽)



図. Rusk 研究所の神経心理ピラミッド. 左は旧バージョンですが、こちらの方がシンプルでわかりやすい感じもあります。右は新バージョンです。新たな項目が増えていますが、基本的な構造は共通です。

(参考) 立神粒子. 神経心理ピラミッド. Yehuda Ben-Yishay, 大橋正洋 (監修) 立神粒子 (著). 前頭葉機能不全その先の戦略-Rusk 通院プログラムと神経心理ピラミッド. 医学書院, 2010, pp53-114